女たちの家

古井由吉

女たちの家

古井由吉

中央公論社

女たちの家

©一九七七

昭和五十二年二月一日初版印刷
昭和五十二年二月十日初版発行

著者　古井由吉

発行者　高梨　茂

印刷　三晃印刷
製本　小泉製本

発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二-一-一
電話　五六一-五九二一
振替　東京一-三四
検印廃止

女たちの家

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

一

都電通りに面して、左は色白揃いの女世帯の履物屋、右手は県人や行商人などの常客を相手の質素な旅館、どちらも奥行ばかり深い二階家の、錆の出かけた波型トタンの壁にはさまれて、細い路地の行きづまりに、春子の家の玄関は日がな埃っぽく翳っていた。

人の出入りが多いのに開閉ての重い格子戸は上のほうが透きガラスになっていて、内から路地がよく見通せたが、外からは光を鈍く反射して、すぐ内に人の立つ気配も悟られなかった。住まいが手狭なので、春子の勉強机は玄関の四畳半に出されていた。子供の頃から手足の冷えやすい春子は冬といわず一時間もすると机の前を離れて、いつでも湿っぽい感じの残る畳にこころもち爪先立ちになり、膝をこごめて首を伸ばす、そんなちぐはぐな恰好で、ガラス越しに路地から表を眺めやった。

電車通りにはたいていこちらの家並みの蔭が落ちていて、向う岸の旧宮邸の塀のところから、

陽が当りはじめる。その敷地のまた奥にはカヤクコ、火薬庫と呼ばれる広い森があって、樫やら椎やらの大木が荒々しい勢いで、下から下から盛りあがるように繁っている。空襲の火を見てから樹までがあんなふうになった、と春子には思われた。つい一年ほど前まで春子がまだ無邪気に友達と木の実を拾いに行ったりしたその森には、繁みの中に防空壕の跡やら、得体の知れぬ穴やら土手やら、身を隠すところがあちこちにあり、野良犬が群れをなして走り、男の子たちも浮浪児のように群れをなして歩き回っていた。或る日、野良犬が土の中から人の腕を引っぱり出したのを、男の子たちが見つけて、大騒ぎになった。すぐ近所の料亭で働いていた若い女が、顔にバケツをかぶせられ埋められていた。

大枝から人が吊り下がることもあった。どろりと淀む沼に、夕方、子供が浮ぶこともあった。

しかし気味の悪いのは、真昼間から森の中をうろつく男女だった。およそさまざまな身なり、さまざまな年配、さまざまな組合わせがあり、男も女もたいてい目が血走っている。妙にひっそりと歩いている。幹の蔭で向かいあって、口もきかず、真蒼な顔で睨みあっている。それが、ふっと姿を掻き消す。そうかと思うと、人の気配もないところから湧いたように現われ、両方とも肩で息をつきながら、子供たちの通り過ぎるのを待っている。風呂敷包みが足もとに落ちて、進駐軍の煙草や石鹸が転がり出ているのを、拾おうともしない。包み紙の鮮やかな色彩が春子の目に焼きついた。

男の子たちは大木の根もとを通りかかるたびに木洞(うろ)の中をのぞきこむ。奥の奥まで調べて、手

を突っ込んだりしている。そして変なものを見てきては、学校で春子たちに聞えよがしに、犬の吠えるような声で知識をひけらかしあった。女の子たちは聞えないふりをしていたが、なかには白い眼をそちらへやりながら、せせら笑いのようなものを唇にふっと浮べる女の子もいて、春子はかえってそのために顔を赤くさせられた。

森の中に女を埋めた犯人が捕ってみると、春子たちも顔を見知っていた男だった。国電の駅の向うに闇市があり、叩き売りが並ぶその中で、ひときわ甲高い、喉を絞るような声を張りあげて、そのつど違った品物を売っていた若い男で、背が低いくせに肩幅が広く、手足が妙に大きくて、猿のようなからだつきをしていたが、顔は美しかった。死体の発見される一週間ほど前に、めかしこんで駅のほうへ行くのを、春子は玄関の中から目にとめていた。

狭い路地の外を横切る人の姿はおもてで見るよりも印象が強くて、いつどこで見かけた人だか、思い出しやすかった。このあたりはたまたま焼け残って、商店などもかえって陰気臭く沈んだ一劃なので、誰もが自然にうつむきかげんになる。そしてたいていはせかせかした足取りの、音のほうは玄関の中まで届かないせいか、どれもたいそう独りぼっちに見えた。ときどき派手な服装も通るけれど、駅前などでは颯爽と目立つその姿が、ここではついいましがたどこかの路地を出てきた様子が目に浮ぶようで侘しく、赤っぽい色がことに見すぼらしく映った。頭を上げて前を見つめて歩く姿も、路地の奥からは、なにかキョトンとしてよけい物哀しく感じられた。

十分おきぐらいに緑色の電車が前のめりになりそうな勢いで通り、そのたびにまず建具が細か

く震え、それから家全体がゆさゆさと揺れる。玄関の三和土（たたき）には亀裂が斜めに走り、コンクリートの面がそこで上下に喰い違っていた。戸も窓も襖も、すんなりと開くのはひとつとしてなく、家は風呂場から手洗にかけて、目にもはっきり右へ傾いていた。おまけに、二階を背負っていた。

玄関の畳を踏む足にも、古い建物のひずみが感じられた。その感じは家の隅々まで渡っていたが、ここではことにひどいようだった。

そうして立っていると、人が路地を入ってくる。うつむいたきり、ここが路地だとよくもわかるものだと感心させられるほど無意識の様子で入ってくる。表通りの先のほうを眺めやりながら、心をそちらへ置き残して入ってくる。角を折れると、不機嫌のやりどころをなくしたみたいに、眉をちょっとしかめる。それから、誰でもまじめくさった顔つきになって近づく。

格子戸が開く時には、春子はもう壁ぎわの机にきちんともどっている。中から見ていたと気づかれるのが厭だった。相手が家族なら、顔も上げない。二階の学生たちはまるで春子が玄関番でもあるように、誰か来なかったか、とかならず聞いていく。おかえりなさい、とすっきり声の出ない年頃に春子はなっていた。

二階はふた間で、その時には学生が三人、大学何年目やら、ろくに本も置かず、外食で暮していた。その三人のところに友達がひんぱんに出入りした。誰が誰の友人ということもない。なかには毎日のように現われて週に一度は泊まりこみ、台所にまで出てくる者もいたが、それがたいてい二階の学生たちと同じ大学でも同郷人でもなく、どこかの遊び場で知り合ったばかりの者だ

った。数カ月のうちに、同居人のように振舞っていた者の足が遠のいて、見かけなかった顔が昼間の風呂場で悠々と歯を磨いていたりする。

常連の客たちは玄関を入ると毎度のようにオヤという表情で、机に向かう春子を眺め、照れくさそうに勉強熱心をほめて、勝手に階段を上がっていく。二階が留守でも、一人で鼻唄をうたったり、天井をみしみし鳴らしてダンスの稽古をしたりして、気長に待っている。そうかと思うと、二階へ上がらずに春子のそばに寄ってきて、自分の子供の頃のことを懐しそうに喋ったあげく、「おい、帰るぞ」「おう、来てたのか」そんな間の抜けたやりとりを階段の上下でかわして、そのまま帰ってしまうこともあった。

学生たちは春子の家の下宿人ではなかった。春子の一家五人の住まう六畳と八畳の間の奥に、階下では日当りのよい六畳と四畳半の間があって、お常さんという六十過ぎの老人が古めかしい家具に囲まれて一人で暮していた。この人がこの家の主人で、春子の父親も学生の頃にはこの家の下宿人だった。

おばさんおばさん、と春子たちはこの老人のことを呼んでいた。暮しは別だが、隔ては襖一枚だった。夜の茶の間で子供がおかしなことを言ったりすると、静かな唐紙のむこうでいきなり老人の笑い声が起り、そのまましばらくこちらの会話に加わった。昼間、母親が部屋の隅の日溜りに坐りこんで針仕事をしながら、姿の見えない相手と、大きな声でいつまでものんびりと話をしていたりする。春子も小学生の頃には、本の中にわからない諺が出てくると、「おばさん」と唐

紙のこちらから呼んで、そういうことに詳しくて説明のうまいお常さんに教えてもらったものだった。

春子の父親は学生の頃にこのお常さんにずいぶん面倒をかけたらしく、隣町のすこし奥まったところに借家を一軒構えていた戦前から、月に一度は日曜日に春子を連れて、その頃から一人暮しのお常さんを見舞うことを忘れなかった。空襲のひどい夜には、自転車に飛び乗って老人を連れに行きもした。防空壕の真暗闇の中で、焼夷弾の落下音が頭上に迫るたびに、「南無大師遍照金剛」と叫ぶ老人の死物狂いに、春子は怯えさせられた。遠くで家の炎上する音が立つたびに、もう身の寄せどころもなくなった、とお常さんはおろおろ泣いた。

息子さんのところが厭なら、いつまででも、うちにいらっしゃいな、と春子の母親は慰めていた。ところが結局焼け出されたのは春子たちのほうだった。あいにく父親が軍需工場のほうに詰めていた夜のことで、あくる朝、お常さんはちょこちょこと元気な足取りで焼跡に現われ、口もきけずにいる春子の母親の手を握って、こうなったらもう、先もなにもありゃしない、アメリカに殺されるまでせめて皆で仲良く暮そうよ、と言って春子たちをさっさと自分の家へ連れて帰った。正午過ぎになって父親はようやくお常さんの茶の間に現われ、昨夜のことをたずねもしないで、三時間も歩かされたとがっかりしたようにつぶやいて、お常さんと春子の母親の前でごろりと横になった。工場のほうはどうでした、などと母親もぼんやり茶を入れながらたずねた。こんな父親は見たこともない、と数えで八つの春子は思った。それ以来、六年あまり、一家はここに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ずるずると住みついている。
お常さんがその頃可愛がっていたのは、予科の時からずっと二階に住みついている川崎という学生だった。この川崎は色が浅黒くて鼻すじがよく通り、目つきもちょっと鋭くて親分肌のところがあり、人に物を頼まれるとまめに世話をするので、同じ下宿人や友人たちから川崎さん川崎さんと一目置かれていたが、自身のこととなるといたって気の弱いほうで、外で不始末をしてきてはお常さんに尻ぬぐいをしてもらっていた。
ヤクザ風の男が夜更けに静かに格子戸を開けて、川崎君いるか、と肩から入って来たこともある。春子はちょうど机に向かっていたが、そんな時には二階へじかに取り継がぬだけの心得はあり、とりあえずお常さんの部屋へ知らせに行くと、川崎がお常さんと火鉢をはさんでひそひそ話をしていて、春子のこわばった様子を見るとさっと顔色を変え、火箸を逆手に摑んで腰を浮かした。お常さんがじれったそうにその肩を押えて坐らせると、平気な顔で玄関へ出て、空惚けたみたいな受け答えをはじめた。やがて男の声が激しくなり、「まずこの婆々アを殺しなさい」とお常さんの落着きはらった声が聞えた。それからいきなり、男の出鼻を挫くような間合いで、「南無大師遍照金剛」とすざまじい叫びが上がった。「この糞婆々ア」と男はいまいましそうに呻いて玄関を出て行った。まもなく入れ違いに、「こんばんは」と重々しい皺枯れ声が入ってきた。するとお常さんはまた穏やかな口調にもどって、あれはまだコドモですよ、あんな子を本気で相手にしてはあんたたちの貫禄にかかわりますよ、などと諭しはじめ、そのうちに二人の声はだんだん

に和やかに世間話のようになり、笑い声さえ立った。結局、兄貴分はわけをすっかり呑みこんで、夜分騒がせたことをばかに丁重に詫びて帰った。そのあいだ、川崎は血の気の引いた顔に太々しげな薄笑いを浮べて聞いていたが、春子が縁側のほうから自分たちの部屋へもどろうとすると、火鉢のところから手を伸ばして、「春ちゃん、行くなよ」とスカートの裾を掴んだ。

この川崎は、ほんとうはこの家の敷居をまたげないはずの人間だった。三年ほど前になにかよほど困った間違いを起したらしく、お常さんとしても自分の息子と娘たちの手前かばいようがなくなって、立退きと出入り禁止をきびしく申し渡したところが、ふた月足らずしてふらりと現われ、そのままま居ついてしまっていた。息子と娘たちはいまでも川崎のことを思い出すと厭な顔をするぐらいで、当の男がいまだに老母に匿われてこの家でのうのうと暮しているとは、夢にも思っていなかった。

息子のほうはもとから母親と折合いが悪くてめったに現われなかったが、三十代なかばの娘たちは月に一度ほど顔を出した。上の娘は亭主と二人で小さな商会をいとなんでいたが、子供もないので、亭主の浮気のことでのべつ大騒ぎを起し、そのつど母親のところに駆けこんでくるのはいいのだが、今度という今度は別れると泣き叫んだあとではきまってとろんと酔ったような声になり、この家もいずれ皆に出て行ってもらって、二階にはもっと品のいい学生を置いて、階下は綺麗に磨き立ててお母さんと二人で静かに暮そう、とそんなことを口走る。美人と言ってもよいほどの顔立ちで、洋装がよく似合ったが、たいていは気持のすさんだ時に来るせいか、肌も唇も

かさかさに荒れ、目は血走り、夏のさなかでも寒風の中を早足で来たような様子に見え、玄関で勉強をしている春子などには目も呉れず母親の部屋へ駆けこむ。

下の娘はごくふつうの主婦の感じで、子供も三人あり、春子にもかならずお愛想を言って、よっこらしょと玄関に上がると、いつでもまず手洗へまっすぐ駆けこみ、それから、「あら、お母さん、元気かしら」などと言いながら出てくる。そして暮しの愚痴をはてしもなく並べていくだけなのだが、何かのはずみに、ここの家土地はいまならいくらいくらに売れる、というようなことをちらっと洩らす。

娘たちにたいするお常さんの態度は親身なようで芯がよそよそしく、お義理で相槌を打っているようなところがあった。娘の帰る時には、玄関まで送りにきて、お愛想みたいなことまで言い、路地を出ていく後姿をガラス越しに、冷やかに眺めやっている。自分のことっきり、頭にないんだから、とつぶやいたりした。

この二人のどちらかが来ている時には、春子はなるべく玄関の机から離れないように心がけた。何も知らずに路地を入ってくる川崎に、玄関を細目にあけて目配せすると、川崎はそれだけで呑みこんで路地を足早に出ていく。そして二時間もしてから忍び足でもどり、格子戸の隅をそっと叩く。春子は茶の間のほうに居る時でもその合図をすぐに聞き分けた。二階から鼻唄まじりに降りて来るのを、身ぶり手ぶりで間一髪押しもどしたこともある。《敵》が階下に来ている時でも川崎は仲間が一緒なら太々しそうなことを言って二階に留まっているのだが、ほかに誰もいない

とすこしもじっとしていられなくて、すぐに背広に着替えて階段の上から春子の顔をうかがい、春子が三和土に降りて外へ出るふりで格子戸をあけると、さっと降りてきて、靴ベラも使わず踵を浮かせたまま走り出ていく。路地の角から振り向かれて、重々しくうなずかれるのが、春子には得意でなくもなかった。

以前は春子と六つ違いの長兄がその役をつとめていたのだが、この兄があまり不機嫌な顔をするので、川崎は困りはててていた。二つ違いの次兄はすぐにニタニタしてしまう性分なので危っかしくてまかせられなかった。春子の母親は川崎のだらしなさに呆れながら、お常さんの娘たちを憎んで、川崎の味方をしていた。それに、娘たちに川崎のことが露見すると、お常さんばかりか、春子の両親の立場もむずかしくなる。そんなわけで春子はその役をつとめていたが、中学へ上がる頃から、おいおいこだわるようになった。

或る日、下の娘が茶の間にあがりこんでいる時に、学生服姿の川崎が忙しそうに路地を入ってきたので、春子が例によって合図を送ると、川崎はいつになく顔色を変えてあたふたと姿を消したが、しばらくすると路地の角から顔だけ出して、閉まった玄関に向かって一所懸命に目配せをくりかえした。見かねてサンダルをつっかけて出て行くと、川崎はすこし離れた四つ角で待っていて、春子の腕を取って物蔭へ連れこみ、「お春ちゃん、恩に着る」と手を合わせんばかりにして、二階から背広を取ってきてくれるよう頼んだ。ほんとに臆病な人だと春子は呆れながら家に駆けもどり、母親は例の唐紙越しにお常さんたちと喋っているようなので、足音をころして二階

へ上がった。壁に吊された一張羅の青い背広の上下と、ワイシャツと縞のネクタイを、ひとつひとつ唐草模様の風呂敷の上に畳んでいくうちに、手足の節々が重たくなってきた。こんな泥棒みたいなことはさっさと済まさなくてはと焦りながら、煙草の匂いの染みついた服をていねいにていねいに、馴れたみたいな手つきで畳んでいる自分自身がつくづく不思議で、うっとうしかった。

風呂敷包みを胸に押しつけて出てきた春子に、川崎は遠くから軽くうなずいて、駅のほうへすたすたと歩き出した。春子は思わず小走りに後を追った。冷い風の吹きはじめた頃で、セーターに毛糸のソックスをはいていたけれど、スカートの下の膝小僧から脛にかけて、肌がかさかさに乾いて粉を吹いているような惨めったらしい感じがあった。痩せっぽちなんだ、と春子は思った。川崎はサンダルを鳴らしてついてくる春子のほうを振り向きもせず、ゆったりと背を伸ばして長い足を運んでいた。気取っているのだとはわかっていても、春子にはその後姿が道を行くほかの誰よりも大胆に見えた。

駅にもう近いところまで来て、春子はようやく川崎に追いついた。さっきから風を顔にまともに受けて走っていたので、息が切れて、目は潤んでいた。川崎は包みを受け取ろうともしないで、春子の一歩前を行きながら、

「春ちゃんにはほんとに世話になるね。春ちゃんも、こうして人に親切にしておけば、大人になって、好きな人のことで困った時には、きっと誰かが助けてくれるよ」

そうつぶやいたかと思うと、まだ灯もつかず風にひゅうひゅう鳴るネオンの下をくぐって狭い

横丁へ折れ、つきあたりの白ペンキ塗りの扉に手をかけて、角のところに立っている春子のほうを、はじめて振り返った。

包みを持たされたままなので帰ってしまうわけにもいかなくて、おずおずと近寄っていったところを、背から抱かれるように押されて薄暗い店の中に入ると、練炭の匂いと、乾燥芋を焼く匂いがして、誰も見えなかったカウンターの向うから中年の男と若い女がにょっきり立ち上がり、口をもそもそと動かしながら、川崎と春子の顔を見くらべて妙な笑いを浮べた。

「厭だわ、お辞儀なんかしてるよ、この子」

川崎は厭な顔をして女から目をそらし、春子の肘にやさしく手を添えて椅子に腰かけさせた。椅子の高さに春子は戸惑った。腰をかけると足が地面につかなくて落着かなかったが、たわいのない趣向だ、となにか張り合うような気持で思った。川崎はそわそわと春子のまわりを歩きながら、あれはないかこれはないかと子供の食べるものを男にたずねていたが、カップケーキと紅茶が春子の前に運ばれると、食べなさいと春子に目配せして風呂敷包みを小脇に奥へ入りかけた。芋を食べながら鼻唄をうたっていた女が、そちらを見ずに呼び止めた。

「川崎さん、めかすことはないでしょ」

「めかすもなにも、これしかないんだから」

「縒りが戻りそうなんですって」

「シンさん、困るな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook